



Skin Surgery 創刊によせて

初代 日本臨床皮膚外科学会理事長
古賀道之
(東京医科大学皮膚科)

永らく構想をあたためてきた日本臨床皮膚外科学会機関誌 Skin Surgery が、ここにいよいよ創刊のはこびとなり、その発刊に多少のかかわりをもったものの一人としてよろこびにたえません。

古今東西をとわず、皮膚の色調や形状、毛髪や分泌の異常で悩みをもつ人は少なくありませんが、それらが直接生命の予後に関係しないために、その治療に真剣にとりくもうとする医師は多くはありませんでした。しかしながらヒトは社会的生物でありますから、それら外界から容易に認識される異常をもつ人の悩みは深刻で、医師が駄目なら非医師へと走り、これをねらって営利を目的とするさまざまな業種のビジネスがあらわれ、多くの社会問題が生じていることは御承知の通りであります。

このような事態を招いている責任の一端は医師側にもあり、この事態に真摯にとりくみ、患者に最善の医療を提供すると同時に、よりよい治療技術の開発をもめざして、1989年5月、形成外科、皮膚科の有志医師からなる日本臨床皮膚外科学会 (JSDS) が発足しました。今日学会と呼ばれるものの数は多く、筆者の専攻する皮膚科学関連の学会を数えるだけでも、軽く十指をこえるありさまですが、単にある特定の疾患や技術についての研究や情報の交流をはかろうというのではなく、医学会の Authority からはとかく軽視されがちであり、従って治療技術水準も高いとは言えないこの領域のさまざまな問題に、既存の診療科の壁をこえた医師・研究者が集まり、共に知恵を出し合って一步前進をはかろうという JSDS は充分にその価値と必要性をもつものと言えましょう。

このような趣旨のもとにわが JSDS は集会の回を重ね、本年2月には第6回目の会合をグアム島で開催したわけですが、これまでの集会で語られた貴重な講演、討論の数々が、実は残念ながら十分な形では記録されておりました。残っているものはプログラム抄録と出席者各自の書き込み、それに記憶の片隅にあるいくつかの討論の断片位のもので、それをもとに何かをはじめようとする時の材料としては誠に不十分なものです。それでは折角の集会も充分に活用されないことになってしまいます。そこで、学術集会で語られたことの記録をプロシーディングの形で残すと同時に、疾患や治療法に関する Up to date の知識をまとめた総説論文、会員の新しい研究成果をまとめた原著論文、それらに対する

意見や反論をまとめた Letters 等の欄をもつ学会機関誌を定期刊行しようという話が進められ、ここにめでたく創刊号が世に出たわけです。

学術雑誌を定期刊行するには、経済面、編集上の技術や労力等、いくつかの実務上のむずかしい問題がありますが、最大の問題は収載論文の科学的水準にあらうと思われます。それは先端技術を使った研究、難解な学説というのではなく、研究の目的、手段、結果とその解釈、体系化の過程が、科学性、合理性に貫かれているということです。現象の解析であれ、技術の開発であれ、世の通説、権威者の学説、自己の先入観や特定の意図にとらわれた研究には、さまざまな歪みがあって現実に適合できません。まず第一に現象をすなおにみつめ、現象の底を流れる法則を認識し、これをまとめて体系化する Science の精神が、いつも生きているところに新しい前進があります。会員諸賢の新鮮な論文が続々と寄せられることを期待します。そして機関誌としての本誌が、単に会員間の情報交換誌であるにとどまらず、いつの日か、新しい情報の発信源として、世界にはばたく日が来ることを祈りつつ筆をおきます。